

令和 4 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名： 認知症高齢者グループホームさんりく

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370300196		
法人名	社会福祉法人三陸福祉会		
事業所名	認知症高齢者グループホームさんりく		
所在地	〒022-0101 岩手県大船渡市三陸町越喜来所通91		
自己評価作成日	令和4年10月1日	評価結果市町村受理日	令和5年1月31日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所は、小規模多機能型施設と併設しており、同地区の方や昔からの知り合いの方も多く利用されております。コロナ前は、一緒にお茶を飲んだり、会話をしたりと常に行き来して交流の場もありましたが、現在は感染防止の為に交流も少なくなっています。その中でも「夏祭りや敬老会」などの大きなイベント時は、感染対策をしながら合同で開催し楽しまれています。また、医療面では主治医と常に連絡を取り合いながら健康管理に努め、利用者やご家族様も安心して過ごされています。職員は事業所、基本理念「地域と共に、その人らしく」を掲げ、日々「その人らしく」生活が送れるように職員同士で話し合いながら介護に努めています。今後もコロナ感染状況を見ながら対策に努め、地域の方と交流する機会を作って行きたいと思っております。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 [https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action\\_kouhyou](https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou)

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

運営法人三陸福祉会は、福祉事業が盛んな気仙地域にあって唯一福祉施設がなかった旧三陸町が主体となって設立された法人である。設立以来30年の間、法人は「地域とあなたとともに」をスローガンとして運営され、平成15年に開設された事業所もベクトルを一にして「地域と共に その人らしく」を基本理念とし、地域から必要とされる事業所として運営されている。震災後の高台移転新築に当たっては、地域の人々との交流の場となる地域交流ホールが設けられ、施設全体が市の福祉避難所にも指定されている。また、家族との交流に制限がある中で、早番の職員が毎日利用者の様子を手書きで1行に記した「一行日誌」の1ヵ月分をそのままコピーして家族に届け、家族から高く評価されている。さらに、避難訓練のみならず運営の重要事項についても施設一体となった取り組みを進めるため、身体拘束、リスクマネジメント、広報等の横断的委員会を組織して検討に着手し、次の飛躍に備えている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和4年12月14日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所理念「地域と共に、その人らしく」を掲げ、職員全体で目標や具体的な取り組み内容を決定し日々の支援に取り組んでいる。職員個々に自己評価を行いながら改善に努めている。	毎年、年度初めに職員に継続の是非を問いながら、18年余にわたり変わることなく事業所の在るべき姿を明らかにし、実践してきた理念である。震災前も、震災直後も、そして現在も、常に地域と共に歩み続け、個別ケアの向上に努めている。本年度も理念の下に「職員のケアの向上を図る」などの三つの目標を掲げながら、職員個々に自ら掲げた目標の達成に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ感染防止のため、地域行事やこども園・小学校との交流も中止しているが、大きなイベント(夏祭り・敬老会)などは併設する「多機能ホーム」利用者と合同で行うなど環境変化を加えながら楽しい時間を持てるよう支援している。	震災後の高台移転新築に当たり、事業所が入る複数事業所合築の施設には、災害時の避難所となる地域交流ホールが設けられ、コロナ禍前までは同ホールが町内会、こども園等との交流の場であった。この10月には敬老会を開催することができたとしている。町内会に加入していないが、管理者は、越喜来の人とはみんな顔馴染みで、ことあるごとに協力しあっているとされている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ感染防止のため、地域行事やこども園や小学校との交流も中止している。広報などを通して、地域に回覧しグループホームでの生活を見ていただく機会を設けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ化により、定期的(2ヶ月に1回)の開催は行えていない。今年度は、5月に開催し次回は8月の予定であったが、コロナ陽性者が出たため開催できなかった。今後は、コロナ感染状況を見ながら開催していくか、書面での質疑の対応を行っていきたい。	運営推進会議のメンバーは、地区公民館長、民生児童委員から老人クラブ代表、利用者家族、警察・消防・行政の関係者と、地域の主だった人で構成されている。事業推進状況、外部評価受審状況から夜間の防災体制、利用者の処遇など、事業所の運営に密接なテーマについて話し合われている。2ヵ月毎の開催が原則だが、本年度は、コロナ禍のためやむなく順延になりがちである。	交流が盛んなこども園の園長を運営推進会議の委員に招聘することについて、検討されることを期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議へ参加して頂く事で、事業所の状況や取り組みなどを伝えられる機会を設けている。意見交換を行いながらサービスの向上に繋がられるように努めていきたい。	施設全体が福祉避難所に指定されているなど、気軽に電話で照会できる行政との密接な関係が出来上がっている。介護保険制度の改正等については、法人総務課が窓口になっている。市地域包括支援センター主催の地域ケア会議に施設長が出席し、事例検討を含め意見交換や相互支援を行っている。	

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束検討委員会に担当者は参加し、委員会内容を毎月の事業所会議で報告している。また、職員は内部研修に参加し身体拘束となる具体的な行為や弊害について理解してケアに取り組んでいる。また、玄関や出入口の施錠を行わず利用者の行動も拘束を行わないように努めている。	法人で指針を作成し、毎月委員会を開催し出席した職員が職員会議で復命している。スピーチロックの解消に向け、接遇チェックシートを活用して職員個々に振り返り、接遇研修を年に2回開いている。起床センサーは使っていないが、コールボタンをベッドの足元に置いて起床時のコールとして活用している。玄関は、夜間のみ施錠している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待委員会に担当者が参加し、委員会内容を毎月の会議で報告している。また、職員は内部研修に参加し高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の虐待になっていないか注意を払いながら防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用されている入所者はいないが、内部研修を通して知識や制度を理解できるよう取り組んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関しては、事前に家族立ち会いの下、十分に説明・理解・納得して頂けるよう努めている。また、改定等の際は、文書を送付した上で、質問等に応じ十分に理解して頂けるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会及び電話連絡時に、報告を加え要望等を尋ねたりしている。ご利用者については、日々の会話の中で意向や要望等を聞きながら支援に反映させている。	早番の職員が、毎日利用者の様子を手書きで1行に記した1ヵ月分の「一行日誌」を家族に届けており、家族の評価は高い。機会あるごとに家族の意見を伺っているが、運営に関する意見等は特にない。利用者は「家に帰りたい」と話す程度で、積極的に訴えようとする人はいない。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常的に職員とのコミュニケーションを図りながら意見や提案を聞き入れている。また、毎月開催される会議でも意見を出し合いながら、運営に反映している。	職員は自らの役割、担当を理解した上で「目配り、気配り、思いやり」の心で利用者と接しており、備品の購入も排泄用品の変更も利用者の身になって職員皆で相談して意見・提案していると管理者は認識している。事業者として、職員の意見・提案は、否定せずまず受け止めることを大切にしている。	

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	勤務状況では、職員個々のライフスタイルに合わせ、本人の希望を取り入れながら行っている。また、個々のレベルアップに繋げるよう、研修参加しやすいように勤務表へ反映し、独自の目標に対して適切なアドバイスができるよう努めている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人では、職員の資格取得について、費用等の助成や資格手当の創設、取得方法の情報提供などを行っている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	委員会活動や内部研修などで交流をもつ機会を設け、意見交換をしながらサービスの質の向上に取り組んでいる。			
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	常に見配り・気配りしながら本人の困っている事や不安な事に耳を傾け、本人の目線に合わせ話を聞き理解しながら信頼関係が築けるように努めている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前の面談時に要望などを伺いながら、ご家族とサービス内容を確認し、話しやすい関係となるように努めている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族からの聞き取りや計画作成担当者との情報交換などから必要な支援を見極め、必要時には各施設等と連絡を取り合いながら対応している。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常生活の中で本人とコミュニケーションを図りながら相手の思いを理解し、出来る事・したい事を見つけ出し、共に生活している雰囲気大切に努めている。			

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日々の暮らしや本人の状態など「一行日誌」として毎月ご家族へ郵送している。また、面会(ビニール越し)では近況報告や心身健康状態等をお話し、本人とご家族との絆が深めれるよう環境を整えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍に伴い、馴染みの場所や人と会う機会は減っているが、定期的に美容室などへ出掛けしている。	越喜来の人であれば大概の事は把握しているが、入居時に一応生活歴等を把握し、今は利用者と行き来できない小規模多機能ホームに通う友人からも馴染みのヒントとなる情報を得るようにしている。コロナ禍で訪問者はいないが、家族に年賀状を出したり、誕生会の写真を送ったりして最大の馴染みである家族との絆の保持を支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずにご利用同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	性格や互いの共通性を把握し、座席の工夫を行ったり、皆さんでレク(余暇活動)を行いながらお互いに支えながらより良い関係がもてるよう支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も、いつでも相談に応じることをお伝えし、必要時の相談や支援に努めている。		

Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント

23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	行動・言動・表情などから、今の思いを知るように日々の関わりを行っている。困難な場合は、今の様子やこれまでの様子などから本人の視点に立って意見を出し話し合っ、思いや意向の把握に努めている。	利用者との会話や仕草などから思いを把握し、推察している。利用者の関心は「食事」であり、美味しいものを食べていれば元気で、風邪にかかることがない。職員は「目配り、気配り、思いやり」の心で利用者と接し、健康で長生きして欲しいとの思いで介助しており、残食は利用者の体調を表す訴えの一つとしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族からの情報や、本人との会話の中から、これまでの暮らし方・生活環境等を把握できるよう努めている		

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の様子は介護日誌・看護日誌・申し送りノートや申し送りで共有し、現状把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的にモニタリングやカンファレンスを行い、ご本人の今の思い・状況を把握し、介護内容を変更しながら、ケアプランにも反映させている。	3か月毎に居室担当が現状をチェックしたケアチェック表を基にケアマネが中心になってモニタリングを行っている。見直しは、原則6か月毎としている。ケアプランの目標には、「その時点時点の一瞬の楽しさを大切にする」という視点のもと、努めて利用者が笑ったり、喜んだりする場面を作り出しながら、職員が本人の感情の動きに触れる機会を持てるものを挙げられるように意識して掲げている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	気づいた事やケアの変更が必要な場合は、申し送りノートに記入し、支援内容を検討し介護計画の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ感染症の影響により、一時帰宅や買い物等を希望される方のニーズに対応はできていない。ご本人やご家族の状況に応じ、買い物等の代行や衣類の補充など必要な支援ができるよう努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在は、コロナ感染防止のため、日々の買い物やドライブ、地域行事などの参加は控えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は、ご家族様の希望を確認し決めている。殆どのご家族様が遠方にある為、定期受診等は職員が対応している。受診の際は、日々の健康観察記録等を持参し医師に報告し、受診結果については、その都度ご家族へ報告している。急変時については、訪問診療もして頂いている。	利用者は、越喜来又は吉浜の診療所をかかりつけ医としている。これまでは利用者全員が越喜来の診療所で受診していたが、主治医の吉浜診療所への異動に伴い、かかりつけ医の変更も多岐みられる。通院は、職員が同行し、バイタル、食事摂取状況を記載した観察記録を持参している。	

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者に体調変化があった場合は、速やかに看護師に報告し判断をして頂き、主治医への連絡や受診等をしてもらっている。24時間相談体制が取れている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院する場合には、本人の情報提供(サマリー)を提供し、ご家族や医療機関と情報交換を行い安心して治療ができるように努めたい。今のところ入院された利用者はなし。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重症化した場合や終末期のあり方について、契約時に確認をしているが、その時の状態変化に応じて、その都度ご家族に連絡し再確認を行いながら、主治医とも相談し連携を図りながら支援している。	看取り指針を策定済みであり、利用者のほぼ全員が看取りを希望し、これまで10人前後の利用者の看取りを行っている。状態の変化に応じ、近隣に住む吉浜診療所の医師が看取りについて家族に丁寧に説明してくれている。特養での勤務経験がある職員3人が看取りを経験しているほか、事業所の近くに住む常勤の看護師もおり、体制的に問題はない。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルを作成し看護師からの指導をして頂きながら実践力を身につけるように努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、消防署立会いのもと総合訓練を実施している。また、土砂災害を想定した訓練や通報訓練などを実施しながら職員が身につけると共に、運営推進委員にも分署長も参加して頂きながら協力体制を築いている。	年に2回法人の全事業所合同の避難訓練を行ない、うち1回は夜間想定訓練としている。消防、消防団、10人程度の職員は、いつでも5分以内に到着できることを確認している。車椅子利用者の障害となる段差はなく、敷地内の一時避難場所には街灯が整備されている。コロナ禍のため、近隣住民への協力依頼を見合わせているが、事情が許せばいつでも再開できる環境にあるとしている。	

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの性格やこれまでの生活環境も踏まえ、言葉や口調に気をつけ、その人に合った声掛けを行っている。また、排泄介助・入浴時の対応ではプライバシーや自尊心を損なわないよう本人の立場に立って対応するように取り組んでいる。	理念やリスクマネジメント等に関する毎月の研修のほか介護の経験の積み重ねをもとに、職員は声掛け一つをとっても、人生の先輩として接し、利用者個々のこれまでの人生を踏まえた関わりに日々努めている。トイレでの排泄介助は、見守りと声掛けを基本に行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日頃のコミュニケーションの中で希望を汲みとれるような働きかけや自己決定できるような声掛けや雰囲気作りを心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	生活のリズムを維持するために、1日の流れは大まかには決めているが、食事の時間や入浴の時間など一人ひとりのペースや希望に合わせて柔軟に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	現在は、コロナ感染防止のため、外出等は控えているが、行事等がある場合はおしゃれができるよう支援している。また、定期的に理髪店の方が訪問したり、本人の希望によっては、外出して商店街の美容室へ行くなどして支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事については、片寄りがないように職員がお互いに献立を確認しながら作っている。また、食べたいものや個々に好きな物を聞きながら提供したり、食事形態も個々の状態に合わせて行っている。片付けなど声掛けしながら手伝って頂いている。	2週間に1度近くのスーパーに職員が出掛け、利用者の好みも取り入れながら食材を購入している。職員が当番割り調理を行っており、食事は命を支える大切なものとして献立を立て、色彩も楽しめるよう必ず果物を添えている。女性職員が作るプリン、ティラミスや夏祭り等のバイキング料理も利用者に好評である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量や水分摂取量のチェックを通し、一人ひとりの状態の把握に努めている。栄養バランスについては、月に1度、管理栄養士にチェックして頂きアドバイスを頂いている。随時、その時の状態に合わせて工夫しながら提供している。		

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、声掛け・誘導、介助を行っている。就床前にはポリデントを使用し消毒を行っている。うがいの出来ない方に対しては、口腔ケアを実施している。また、入れ歯が合わなくなったり、口腔内に異常が見られた場合は、歯科診療(訪問診療)を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を見ながら、1日の排泄パターンを把握し、声掛けやトイレ誘導、介助を行っている。自立されている方には、見守りまたはさりげなく声掛けを行っている。	布パンツ使用の4名とリハビリパンツの1名の5名が自立している。入居前は家族の手が回らないためリハビリパンツを使用していた2人は、入居後に布パンツ使用で自立している。夜間、職員は2時間おきに巡回し、皮膚状態を観察しながら、時間帯に応じて使用するオシメを代えている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェックで状況を確認しながら、水分補給や乳製品・食物繊維等を提供できるだけ自然排便ができるように努めている。状態によっては、主治医に相談し排便コントロールも行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	1週間に6日間は入浴の日を設けている。個浴・機械浴を使用しながら支援している。その日の健康状態や本人の気分を確認しながら入浴日を変更するなどしながら随時対応している。入浴の際は、職員はコミュニケーションを図りながらゆっくりと心地よく入浴して頂けるよう努めている。	週に2回、月曜日から土曜日の午後に3人ずつを基本として、一人30分程度をかけゆったり入浴している。浴槽を跨げない3人の利用者は小規模多機能ホームの機械浴を利用している。入浴は職員が利用者1対1でコミュニケーションを深めたり、肌観察の機会である。入浴を嫌がる場合には、担当する職員を代えたり入浴日を変更しながら対応している。着替えは入浴日に準備している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動の場を多く提供し、夜間安眠ができるよう努めている。また、個々のリズムに合わせて就床時間前には好きなテレビを見るなどしながら過ごし頂き、安眠が出来るよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人ひとりの病歴、内服薬の用法、副作用について理解し間違いのないように職員2名で声を掛け合いながら服薬介助を行っている。症状の変化を観察し、必要時には主治医に相談している。		

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	塗り絵やレク・歌・家事の手伝いなど出来る事を行って頂き、毎日の生活が楽しく過ごせるように支援している		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウイルス感染症防止対策のため、外出の機会は減っているが、感染対策をしながら近場のドライブ等に出掛けるなどしている。また、家族の希望にて一緒に自宅へ戻るなど外出機会も設けている。	コロナ禍で毎年の花見や紅葉狩りは自粛しているが、それでも近くの「どこんじょボプラ」などにドライブに出掛けている。感染対策をした上での家族との面会時間や外出に制限をしておらず、法事や外食に家族と出掛けている利用者もいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族からの預かり金は管理者が管理している。排泄用品や受診料、理容・美容代などに使用し、毎月「金銭出納簿」を記入しご家族へ報告している。自己管理できる方はいない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	ご家族と自由に連絡が取れるように希望に応じて支援している。また、ご家族からの手紙の返事や年賀状など職員が手伝いながら行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	日差しや照明の調整、室温や温度調節を行い、季節の行事や装飾などを職員・入所者と一緒に作りながら装飾し、季節感を取り入れながら快適な環境作りを心掛けている。	キッチンを併設したホールや廊下の照明は、昼光色で統一され、事業所全体が柔らかく心温まる雰囲気を出している。8人用の丸と四角の食卓2台と食事介助で使う一人用の食卓が配置され、この食卓で利用者はホタテの身むきの手伝いやトランプに興じている。ぬり絵やクリスマス飾りなど、季節感が感じられる装飾がある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂ホールやソファで自由に過ごしたり、小規模多機能へ行ったりと利用者の状態や思いに合わせて過ごしている。		

令和 4 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好み のものを活かして、本人が居心地よく過ご せるような工夫をしている	入所時に自宅で使い慣れた家具や馴染の物を 持ち込めることを説明している。また、入所者が 自ら作った作品を飾ったり、家族からの贈り物を 飾ったりしながら心地よく過ごせるように支援して いる。	ベッドや洗面台、チェスト椅子等備え付けられ、 入り口には、職員手作りの表札が掲げられてい る。家族写真や利用者作成の塗り絵作品を飾っ た部屋の壁には、大きな丸い掛け時計がどの部 屋にも用意されている。窓側は障子窓で落ち着 いた雰囲気となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境つ くり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わ かること」を活かして、安全かつできるだけ 自立した生活が送れるように工夫している	施設設備は安全面に配慮した作りとなっている。 利用者の居室入口に名前を張ることで間違える ことなく、いつでも自分の部屋へ行くことができ、 トイレへの張り紙をすることで一人で確認なが ら排泄できたりしている。危険個所を職員は把握 し安全に生活ができるよう支援している。		